

江戸時代の紀行文(2)

「太宰府紀行」

以前このコーナーで「宇佐詣記」という紀行文を取り上げました(令和3年11月1日号)。今回は「太宰府紀行」を紹介します。

「太宰府紀行」は、寛政8(1796)年の紀行文で、九州大学附属図書館に所蔵されています。作者は不明ですが、おそらくは津和野の人で、この本は作者の自筆稿本と考えられます。内容が具体的に興味深いこと、また訂正箇所が多数あってその制作過程がうかがわれることなどから、福岡教育大学名誉教授板坂耀子さんが全文の翻刻をしていますので、太宰府を中心に、その内容を垣間見てみましょう。

まず、「太宰府紀行」と題されていますから、太宰府を訪れるのが目的で、たとえば冒頭には「まだしらぬひの筑紫かた経回の志侍りて」(まだ知らない筑紫を巡り歩きたいという思いがあった)と記し、また「小屋の瀬」(木屋瀬)宿の「右福岡道／左長崎道」と刻まれた追分道標では、「先ツ太宰府への志しなれば直ぐに長崎道へ掛り」(まずは太宰府へという思いなので、すぐに長崎道に入り)とも記しています。その後、米の山越えて太宰府に入った作者は、太宰府天満宮鳥居の脇の泉屋に宿をとります。

天満宮では、たまたま出会った別



当延寿王院の役僧中將なる人物に伴われ、「物かたり」しながらの参詣で、その様子は板坂さんがいわれるように、きわめて具体的に興味深いものです。

翌日にも天満宮を参詣、「あいそめ川」を見物、光明寺の渡唐天神を拝み、さらに観世音寺を参詣します。次に訪れた都府楼跡では「古えはこの辺都て内裏の境地と聞えぬれども今は田野と変じ、まばらに礎石三四十ばかり残せり」「此辺に布目有て色々模様つきし瓦の欠など有、誠に旧物と見ゆ」などの感想を記しています。それからまた、ちよつと足を延ばして榎社、さらに二日市温泉を訪れた後、太宰府の宿所泉屋に戻ったのでした。

このように天満宮を参詣し、そして観世音寺・都府楼跡を訪れ、さらに二日市温泉まで足を延ばすという一連の行程は、以前取り上げた「宇佐詣記」にも共通するもので、これが江戸時代に流行したといわれる「さいふまいり」のひとつのパターンだったのかもしれない。

【バックナンバーはこちら】
ページID 7241